

皆さん、こんにちは。今日から親鸞聖人がご製作くださいました、「正信偈」について皆様方と一緒に学ばせていただくことになり、まことに身に余る尊いご縁をいただきましたこと、心から感謝申し上げる次第であります。

十一年間、『歎異抄』を中心に学ばせていただきまして、十一歳、歳を重ねた。そして同時に深まったという。なぜ深まったかと言えば、親鸞聖人のおおせに会うことになり、いたずらに歳を重ねるだけではなく、生きているということはなんと大事なことかという意味があると、『歎異抄』を通して学ばせていただけてきたのでございます。

昨年八月に『歎異抄』が終わりまして、何ヵ月ぶりに皆様方にお会いでき、また初めてお会いする方もいらっしゃいます。お互いに親鸞聖人の大きな恩徳を受けて、阿弥陀様のご本願の教え、大きな光の中で出遇わせていただいて。お互いにかけてあげない人生において親鸞聖人の教えに会い、「正信偈」を学ばせていただくということはなんとという有難いことであろうかと思うことのでございます。

『歎異抄』は、唯円大徳という方が親鸞聖人に出遇われて、親しくおそばにお仕えしてお聞きすることのできた教えを、忘れることのできない言葉として生きることができた。そこには非常に深い感動、喜びがあるのでございます。もし親鸞聖人の教えに遇わなければ、自分の人生は空しく終わったであろうという、そういう考えが唯円大徳にはおありになる。『歎異抄』という名にもなっておりますように、親鸞聖人が亡くなられた後に、親鸞聖人のおおせになったこととは違う異義を唱える方が出てきた。そのことを唯円大徳は深く悲しまれ、異義異端が行われておるまさにそのことを、大切なご縁としてしたためられた。これが『歎異抄』でございませう。その『歎異抄』は一度聞けば忘れられないような。そういう人間に訴えてやまない、闇の中を歩いていた人間がまさに教えの光に遇うような、そういう尊い真実に遇うということが『歎異抄』にはございませう。

私は、高校二年生の時に『歎異抄』の言葉に初めて遇いました。『歎異抄』を通して、親鸞聖人のお言葉、教えに出遇うことができたということを通して、自分の人生が開かれたと。人間に生まれて良かったと。人間なんか生まれてこなければ良かったのにとすることも多々あった私自身が、『歎異抄』に会い、親鸞聖人に遇うということを通して、素晴らしい人生をいただいたかということをお教えられつつあるのでございませう。

『教行信証』は親鸞聖人の九十年のご生涯をあげての畢生の書。根本のお聖教になるのであり、私たちが人生を生きていく上で根本の教えです。真実の教え。親鸞聖人は浄土真実の『教行信証』と言われております。これは非常に大事な意味があります。何故浄土真実か。

この現実世界は人間の虚偽ですね。嘘なのだけれども本当らしく憚っている。例えていけば、人生は金が大事なのだよと、本当らしいけれども嘘ですよ。娑婆ということはこの現実の苦しみの闇の世界ですね。たくさんの国々がありますけれども、日本では真実であっても他の国では真実ではないということがあります。これはもう歴史の上で明らかです。今でも殺し合いをしているわけです。この国だって太平洋戦争の時代は神国日本で日本の国が世界中で一番立派であるということをおっしゃっていましたがそれはとんでもない嘘でした。娑婆はそういう国の利害とか都合とかそういうものによって立てる教えが、とんでもない教えを強制して迷わせてしまうという問題があります。

浄土真実の教えに遇わなければ自分も駄目になり人も駄目にして生きなければならぬという。地球上がそういうことに覆われる。戦争でどれだけの人が死んだか。これを考えれば明らかですね。今だって原爆や水爆で一挙に何十万、何百万と殺せるものを持って、それがあから平和なのだって。おかしいでしょ。懐に短刀を入れて喧嘩しないから平和だと言っているようなものですよ。本

当の平和じゃありません。

浄土真実とは、光明無量寿命無量。国境がないわけです。人間を超えているわけです。あらゆる世界のあらゆる人間の上に真の真実が用く。それが浄土真宗の教えです。阿弥陀の本願こそが真実であるという。本願ということは本当の願いですね。根本の願い。真実の願い。何故そういうことが言えるかということ、人間の願いはどうしても虚仮と有限なのです。

しかし親鸞聖人においてはよき人、法然上人に出遇って阿弥陀の本願の真実に遇うということにおいて本当に自分が照らされた。人間が自他共に照らされる。浄土の教えの中には、必ず自他ということがあります。そこには自分一人ということが絶対に抜かすことのできない焦点としてあります。だから浄土真実の『教行信証』ということは、十方衆生に開かれた仏道であると同時に、それは私一人の上に、本当にこの教えこそ私の出遇った教えであるというそういう意味があるわけです。それが十方衆生の道が我が道となるという。本当に本願に開かれた仏道である。だから教えというのはそういう十方衆生の上に開かれた教えである。十方衆生のみ名が、この人生を空しく終わりたくない。与えられた人生を人間に生まれて生かされて、本当に充実した人生であったと言える。そういうことを仏弟子と申すわけです。仏ということは本当に目覚めるという意味ですね。目覚めということがないと虚仮に縛られていることに気が付かないわけですよ。でも仏に遇うと、人間を縛るものが人間の欲望であると。我執である、執着である。これが知らされる。娑婆の虚仮の姿なのです。

その真の教行をいただくところに、真実の信心が表れる。これは人間の信ではありません。人間の上に表れるけれども仏様の全存在を衆生の目覚めの上にかけてくださる。これが浄土の真実の信です。人間が私の心であなたを信じますと言っても、それは感動があるかもしれない。しかしそれは状況によって左右されていくわけです。

人間の信は、相対であり、有限であり、ご都合になる。何故浄土真実の信かということ、如来様からこの私が徹底的に信頼されておると。もうこの私のありのままの姿を徹底的に信頼されている。そして、それを不退転。迷いの世界に溺れこまない。目覚めた人生を目覚めた人生として生きていくことができる。それを正定聚という。この人生において、生身の命を生きる現生において、正しく仏になるということがその正定聚。そういう人々の仲間に入るといふ。それが不退転です。

だからこの教えに遇いますと、私たちの人生が、命のある限り、念仏者として念仏を申して信心をいただく、目覚めていく。そういうものとしてこの人生を生きていくことができる。往生浄土の人生を生きることができる。往生浄土というのは、光明無量寿命無量の世界に生まれ往くということです。それは同時に南無阿弥陀仏の念仏を私たちの上に回向してくださっている。念仏は如来回向ですね。仏様が私たちの上に表現してくださった。その念仏をいただいて、真の信心に目覚めて、浄土を背景とし、故郷として今を生きていくことができる。往生というのは、死んでから後ではありません。往生浄土の人生は、今、私たちの上に開かれる。そういう意味がございます。

親鸞聖人は、よき人、法然上人に出遇うということを通して、真実に出遇うことができ、人間に生まれたということが真に尊い、かけがえのない意味があり、もし法然上人を通して本願真実の教えに出遇うことがなければ、自分は空しく迷いのまま終わってしまった人生であると。そういう深い悲しみ、痛みがあるわけです。その自らがよき人、法然上人に出遇うことを通して、本願真実のおみのは、仏陀釈尊が顕された真実である。その教えは、インド・中国・日本と三国を通して念仏者の方々が相続してくださったおみのものであるということに深い感動を覚えて、十方衆生に捧げると。共に生きるという深い志願を、『教行信証』を顕されました。

『教行信証』を顕されたということは、親鸞聖人が、この苦悩の深い人生において本当に出遇うべきものに出遇うことができたという。天地を揺るがすような感動ですね。それを十方衆生、量り

知れない人々と共に喜ばずにはおれないという、そういうような深い志願ですね。だから親鸞聖人は、浄土の本願の信は親鸞一人がためなりけりと、いただかれておるのであります。いただかれておればこそ、十方衆生の一人の上にこの教えが本当に待たれている教えであると、願われている教えであると。だから親鸞聖人の出遇われた、開かれた世界は本当に広いわけです。本当に深いわけです。

私が、「正信偈」の言葉に出遇ったのは高校二年生の時でありました。友達の家泊りに泊っていた時に「正信偈」が軸になって掛けてあったのです。その時、「極重悪人唯称仏 我亦在彼摄取中 煩惱障眼雖不見 大悲無倦常照我」と。この言葉がね、非常に印象に残りまして。特に大悲無倦常照我。現代語訳では、

煩惱が眼を障えて恵みの光を見ることができなくとも、弥陀の大悲は、倦くことなく、常に我が身を照らしたもう、と説いています。

私たちはもうすでに大悲の光に照らされているのです。照らされているのだけれども、その自覚がないということですね。自覚がないということは人間にとって真に悲しいことです。この命が活かされているということは、如来の大なる大悲の用きの中に、活かされておる。その内容を言えば、生きとし、生けるものの命をいただいて生きておるのであると。

生きとし生けるもののいのちをいただいて活かされているのだなという、そういう自覚がなかなか乏しいわけですね。大悲無倦という所には人間の悲しみということもそこにはあるわけです。まあそれは人間の悲しみは小慈小悲と言われますが、私たちが育ってくるのに親を一度も悲しませなかったか、というところでしょうか。私はとても言えません。しかしそういうことも、如来の大悲に遇うということにおいて、大事なご縁となりましたねと、そういう意味が与えられるのであります。

それからこの「正信偈」はですね、蓮如上人の時代からずっと相続されているのでありますが、私が申し上げたいことは、“キミョームリョー”というね。あなたの宗教はなんですかというと、“キミョームリョー”ですというふうにね、かつてはそういう言い方が非常に多かったのです。それは漢字が読めなくても、自分の名前が漢字で書けなくても、お勤めをして聞いてね。「帰命無量寿如来 南無不可思議光」ということが身体に沁みってくる。農作業していても、商いをしていても、ふっと時間ができるとその言葉が浮かんでくる。そういう人々の生活の中に念仏をいただくということが浸透してきた。

私は昭和十一年の生まれでありまして、戦前の生活も幾分かはわかる。働いて働いて、月に一度の旗日があるかないかというような生活。だから盆と正月というのは待ちに待ったというような意味があったというわけです。本当に働いて働いて。啄木の歌にありますように、働けど働けど我が暮らし楽にならずという。そういう人間の生活の中に念仏を称えることができるということにおいて、念仏者なのだ。まさに人間が人間として生きていくことができる道が、教えられたという、そういう深い感動がね、庶民に浸透してきたわけですよ。

これは曾我量深先生のお言葉で「正信偈」のお話をされた時に、「正信偈」の一句、一句が南無阿弥陀仏の念仏でありますと、いうことをおっしゃったのです。それは「帰命無量寿如来 南無不可思議光」から始まっておるのでありますが、それはずっと全体を貫いておると。私はそのことはね、非常に大事な意味があると思うのです。一句、一句が南無阿弥陀仏なのですよという。そういうことを教えられますとね、出遇っていける、尋ねていける。何故念仏一つが大事だと言われるのでしょうか。

これは大事な問いです。その問いをイージーに、答えるではありません。それを大事に大事に自分自身に頷けるまで聞いていくと。私自身に対する喚び声であったと。他人事になるとね、なんでこんなこと、難しいことをやらなきゃならんのだということになるけど。肝心要は私自身に喚びかけられていたということ。

それをもう一つ言えば、なんで人間に生まれてきたのでしょうか。私というのはどういう人間でしょうかと。どうなれば私は死んでいくことができるのでしょうかというようなことをね、思い出した歌があるのです。

死はこはく 生はさびしき 老いの冬

福島県の佐々木さんという方の歌です。恐らく年配の方でしょう。死ぬということが怖い。歳を取ってくるということは寂しいと。ここに生死という問題がある。生死の苦悩を超える。これは人生の根本問題であると。観念的な問題じゃないですよ。誰でもが抱えている人間の生身の問題なのです。生はさびしきってお年寄りだけじゃないでしょ。夫婦生活、家族のご縁、友達。繋がりはあるけれども、閉鎖された孤独感というのはありませんか。死ということも、自分自身が死ぬのでありますけれども、大事な方の死ということもあるでしょ。人間の悲鳴がね、私は聞こえてくるような気がいたします。この方の場合はまだこういうことを表現されたということが、生きる大きな力になっていると思います。表現されたということは、表現されたことにおいて生きるということをおね、覚悟したと。そして、自分の表現した歌からもう一辺自分自身が問い直されるという意味がある。

南無阿弥陀仏の念仏を申すということは、私たち人間存在それ自身の表現を与えてくださると。存在しているということが、生かされて生きとることの全表現なのだということを念仏が教えてくださる。そういう意味があると思います。これもね、出遇ってびっくりしたのですが、

乱視われ 満月花の ごとくなり

乱視われっていうのは目が悪くなってね、色んなものが重なって見える。空に出ている満月がね、花のごとくなるという。一〇七歳の中村君代さん。すごい歌でしょ。長生きされることも大変でしょう。乱視になられて、満月が花のようにね、美しいというか賑やかだという。それを受け止めておられるわけですよ。老いということを受け止められ、老いから起こる不自由なことも受け止めておられる。これやっぱね、受け止めるということがなかなか大変なことですね。信心ということはそういう受け止めるということと非常に深い。大事な目覚めがね、受け止めるという所に開かれてくるわけですね。

お手元にお渡しいたしました、『正信偈』についての解説をちょっと読ませさせていただきます。

『正信偈』は、真宗門侶にとっては、朝夕のおつとめ（勤行）に、念仏・和讃とともに誦誦され、数ある聖教のなかでも最も親しまれている聖教のひとつです。

くわしくは、『正信念仏偈』といわれ、親鸞聖人の主著である『教行信証』行の巻の最後にうたわれた六十行、百二十句の仏徳讃嘆の偈頌です。

この『正信偈』には、だれもが、この身に喚びかけられた如来の真実心に目覚め、たしかかな人生を生きることができる本願念仏の法が、感動と謝念を込めて讃嘆されています。

要約していえば、偈の前段（『大無量寿経』による依経分「難中之難無過斯」まで）には、親鸞聖人が「真実の教」としていただかれた『大無量寿経』の教えの要が説かれ、如来は「た

だ弥陀の本願海を説かん」がために出興され、「五濁悪時の群生海」に、本願を信じ念仏申す、すなわち真実信心に生きる道が開示されたことをたたえています。後段（七祖による依積分「唯可信斯高僧説」まで）には、その真実の教えが、三国七高僧に受け継がれ証されて、この日本に選択本願の仏道が伝統されたことを深く敬われ、みなともに、ここを同じくして、真実の教えを信じるべきことをすすめて偈が結ばれています。

「正信偈」の前半には、『大無量寿経』によってですね、念仏して真実信心に目覚めて生きると。もうありとあらゆる問題が渦巻いておるその渦の只中で人間であることを獲得していける道であるということですね。後段の七祖っていうのは三国七高僧でありまして、インド・中国・日本と。インドでは龍樹、天親菩薩。中国では曇鸞、道綽、善導。日本では源信、源空という七高僧ですね。三国七高僧に受け継がれ証されて、念仏者として生きるそういう道が証明される。だから七高僧一人の背後には量り知れない人々がいらっしゃるといって、そのことを忘れてはなりません。そしてその時代、その人々の苦悩の中から誕生されているという大事な意味があります。

ここで特に忘れられないことは、『正信偈』が「帰命無量寿如来 南無不可思議光」の二句から始まっていることです。まず、如来の尊号をあげて帰敬のこころを表し、いつでも、どこでも、だれでもが称えることのできる南無阿弥陀仏の念仏が『正信偈』全体を貫き、それがそのまま、いかなる人びとの人生をも貫いて信心を喚び覚まさずにはおかない真実の法であることが表されていることです。

尊号というのは南無阿弥陀仏の名号ですね。本尊として私たちに喚びかけてくださるという意味で尊号として。帰敬というのは人間が本当に帰することができるところ。いのちの依り処。本当に帰っていく依り処とすることができる世界。そしてそれを敬ってですね、本当に尊んで。全身をかけて、全身を投げ出して、全身を挙げて帰敬すると。それを表されてありますね。「正信偈」にはそういう大きな意味がたたえられていると教えられます。

どこまでも親鸞聖人が、真実の法に出遇い得たことに感動され、「仏恩の深遠なることを信知して」うたわれた偈が正信念仏の御歌です。

真実の法というのは具体的には阿弥陀の本願の真実です。十方の衆生、皆一人も漏らさずすくい遂げなければ、仏とはならないという誓いですね。もっと端的に言えば、あなたご自身が目覚めないならば、私は阿弥陀とはなりませんと、そういう誓いです。他人事じゃないのです。仏様が人間を目覚まさずにはやまないという、そういう深い願いをかけて、一人ひとりの上に喚びかけられ、声をかけてくださっておると。その喚び声が、南無阿弥陀仏の念仏であります。

もっと具体的に言えば、私たちが御同朋、御同行のご縁に恵まれた。聞法が大事じゃないのと、祖先から教えられてきたことではありませんか。仏道の伝統から喚びかけられ、受け継がれていくことではありませんかということ。そういう喚びかけを受けて、私たち一人ひとりが聞法のご縁をいただいて、念仏をいただいて、目覚めた人生を生きるという。そして生かされ生きるということ自身がなんという深い恩徳でありましょかということをお教えされると。

三帰依文で、「人身受け難し、いますでに受く。仏法聞き難し、いますでに聞く」とありますよね。本当に人の身は受け難いということをお感じするのは仏法を聞くことを通してであると。仏法を聞くと、人にはなんとまあ受け難い身を受けたのだと。それはもう曠劫已来の果てしない命の

歩み。念仏を申し信心に目覚めよという大きな願いがある。決して観念的ではない。生身の人間の苦悩を本当に開いていく。そういう大事な意味があるのです。

曾我先生は「正信偈」のことを御歌とおっしゃっておいりました。偈頌ともいいます。ガータ。歌というところには非常に深い意味があります。感動なのです。念仏をいただいて、真の信に目覚めるといふ感動は、いかなる時代、いかなる人びとの上にも深い感動となって相續されていく。感動が感動を呼ぶわけです。私たちは今、親鸞聖人に会うことができる。この本の三ページに親鸞聖人がお書きになられた真筆。坂東本と呼ばれておいりますが、今は国宝として保護されておいります。親鸞聖人がお書きくださった「正信偈」を私たちはいただいていくことができる。

坂東本は「正信偈」の途中、何度も何度も書き消されて書き加えられた、そういう箇所がございいます。だから親鸞聖人ご自身がいかに大事にこの「正信偈」を製作されたか。そこには親鸞聖人ご自身の感謝、仏恩の深さに讃嘆されるということと同時に、あらゆる人々と共に歌いたいという。そういうものがね、そこに込められておいります。私たちは、七百年以上の歳月を超えて、親鸞聖人のいただかれた感動、その喜びを共にすることができるわけです。その感動ということがね、私が特に思いますのは、今の時代は感動ということを見出すことが困難な時代です。合理主義で便利にはなつて感心したり喜んだりしておるけどもすぐ冷めてしまう。そして次の欲望を追いかけて、また追いかけてという。人間が追い回されている時代じゃないですか。「正信念仏偈」に会うということを通して、自分自身に本当に出会うということができる。そして、三国七高僧に貫いて念仏を相續してくださったよき人々。その教えを明らかにしてくださった仏陀釈尊。その教えを本当に明らかにすべく、根源となった阿弥陀の用き。量り知れない命の歩み、歴史。そして一人ひとりの命が何事にも変えがたい尊いのちをいただいて生きていられるのであります。最後なのですが、

したがって、『正信偈』に親しむとき、浄土真宗の伝統が、インド・中国・日本の三国にわたつて流伝し、国を超え時代を超えて、人びとの生活の真の依り処となり、いのちとなつて脈々と生きつづけ、この私まで喚びかけていることが知らされるのです。

先程もありました、インドでは龍樹、天親。中国では曇鸞、道綽、善導。日本では源信、源空。「正信偈」をいただくことを通して出会うわけです。そういうダイナミックな、非常にスケールの大きい深い、そういう歌ですね。それは親鸞が始めたわけじゃないです。親鸞ご自身が出遇った仏道の歩みであったと。そこに念仏の伝統を受けて、讃嘆されるという大事な意味があるわけです。

こういうことが「正信偈」であります。短い言葉の中で私の感じているところを書かせていただいたわけですが。今日はですね、『正信偈』につきまして、第一回目ということでもありますので、初めに語注のところをもう一辺、ご覧いただきたいと思ひます。

正信偈…つぶさには『正信念仏偈』。念仏を正信する偈。

「しかれば大聖の真言に帰し、大祖の解釈に關して、仏恩の深遠なるを信知して、正信念仏偈を作りて曰わく、」（親鸞『教行信証』「行の巻」）の言葉に續いて、正信偈が始まる。

「しかれば大聖の真言に帰し、大祖の解釈に關して、仏恩の深遠なるを信知して、正信念仏偈を作りて曰わく、」を普通は偈前の文と言われている。帰しというのは大事な意味があります。聞いておくわつて話じゃないのです。自分の全身全霊を挙げて帰入すると、帰依すると。大聖の真言。これもね、大事な意味なのです。私たちは、仏陀釈尊の真実の教えに遇わなければ、世間の嘘っぱ

ちの教えをね、自分の教えとしてぶざぶざと生きてしまう。二度とない人生をね、色んなものの奴隷となって、ぶざぶざと終わってしまう。大聖の真言というのは真実に目覚めた仏陀釈尊の真実のお言葉に出遇って、帰して初めて人間に生まれたという喜び、生きがいを得ると。大聖の真言に帰し、大祖の解釈っていうのは仏陀釈尊の教えを命がけで生きられた。三国七高僧ですね。三国と七高僧の解釈。解釈というのは、単なる解釈じゃないのですよ。仏陀釈尊の教えを本当にその時代のその人々の中の一人として身をもって生きられたという。そういうこの本当に領かれて身をもって生きられた。大祖の解釈に関してという。に関してというのは、開き見るという。これは「正信偈」の中に七高僧の教えが称えられていますよね。つまり親鸞聖人は一人ひとり、その教えに出遇われた。受け止められているわけです。その教えの中のエッセンス。大事な大事な言葉ですね。それを開き見て。親鸞聖人ご自身が本当にいただかれて、仏恩の深遠なるを信知して。仏様のご恩の深遠。仏様の無限なる智慧。無限なる慈悲。人間の計算心では量ることのできない無限なる深く、遠いということはもう本当に人間の意識、計算を超えて、この身、心全体を生かしているような。恵まれているような、そういう仏恩の深遠なるですよ。もうすべての人がそういう仏恩の深遠の恩恵を、身はすでに受けているのである。しかし、気付いているかということになると、なかなか気付くことは困難であります。それだけ人間の迷いが深い。迷いが深いがゆえに、喚び覚ましてやまない南無阿弥陀仏の念仏となって、喚びかけるのであります。そういう非常にいたれりつくせりというかね、非常に深いお心がね、「正信偈」を作られる前に、仏恩の深遠なることを信知して、正信念仏偈を作りて曰わく、と。

それから「正信偈」は、「帰命無量寿如来 南無不可思議光」で始まっておるのでありますが、このテキストの現代語訳。私はこういうふうに現代語訳させていただきました。

帰命無量寿如来 南無不可思議光
生きとし生けるものを
喚び覚ましてやまない
無量寿如来に帰命し、
思いはかれない智慧のみ光に帰依いたします。

生きとし生けるものを、喚び覚ましてやまない。つぶさには人間に喚びかけられている。私に喚びかけられているということがあるのです。その私に、人間に喚びかけられているということは同時に、阿弥陀の衆生救済を誓われる本願では、たとい我、仏を得んに、十方衆生っていうことが喚びかけられておるのです、十方衆生。ここで私がこう教えられますのは、人間中心主義ではないと。人間中心主義ではない。現代の生き方は人間中心主義になっておりませんか。生きとし生けるものということが忘れられておるという。だから私は時代社会に対する本当に深い悲しみ、批判ということがね、帰命無量寿如来というところには喚びかけられておると思うのです。生きとし生けるものを喚び覚ましてやまない無量寿如来に帰命し、思い量れない智慧。思いはかれない智慧っていうことも大事なのですよ。これは文明、科学というものが進化してですね、今までわからなかったことがわかるようになってきたと。その便利さ、恩恵もあります。

しかし闇も深いわけです。ボタンを押せば、一発の水爆で何十万、何百万という人が抹殺されるという。こういう闇ですね。それだけじゃありませんよ。若者がね、一生懸命学んでやっと仕事に就いたとしても、合理的な計算であんたは必要ありませんというような形で排除される。悲しいかな、人間がもの扱いされる。人間が人間として見つめられていない。見出されていない。戦争して、爆弾で殺すのも人間なのだけど、殺していいという前提に立っているでしょ。こんな恐ろしいこと

が今の時代の中で行っているのですよ。だからなかなか人間は人間の抱えている闇に気付かないということがあります。そういうことをね、「帰命無量寿如来 南無不可思議光」ということで、まず南無阿弥陀仏の念仏から始まっている。で、今の言葉の注ですが、

無量寿如来…阿弥陀仏のこと。「無量寿」は梵語 *Amitāyus* 阿弥陀の訳で、はかりなきいのちの意。寿命無量ともいい、過去から未来までの三世にわたって悩める人びとを救う。「如来」は、梵語 *tathāgata* の訳で、「如」は真如、一如ともいい真実の法の世界のことで、如来とは真如より来生せるものの意。

無量寿は量り知れないいのちの真実の用きがですね、真実の用きの世界から、如来が私たちの上に表れてくる。用いてくださるといふ。この言葉で書くと非常に難しく思われるかもしれませんが、真実の用きが私たちの上に光となり智慧となり念仏となって表れてくださるといふ。そういうね、意味ですね。

帰命…梵語 *namas* 南無の訳で、心から信じ敬う意。帰礼・敬礼・信従ともいふ。「〈帰命〉は本願招喚の勅命なり。」（親鸞『教行信証』「行の巻」）

南無っていうのは *namas* という言葉を音で南無と。南、無しと書くのですが。その訳です。是非とも私たちが耳を傾けなきゃならないのは、帰命は、本願招喚の勅命なり。これは親鸞聖人が帰命という言葉について。帰命っていうのは私たちが仏様に帰命することなのです。その帰依する、帰命する、信順するってことは本願それ自身が私たちを招き喚びかけてくださる用きであるのだという。如来の大いなる喚びかけに、応じて。喚びかけがあって、私たちは南無帰命することができる。これは大変な意味なのです。もしそのことがはっきりしなければ、いわゆる都合頼みの信心になるわけです。お願いをして念仏唱えて拜んでおけば必ずいいことを与えてくださいますねという。交換条件ね。あるいは物取り信心ね。そういうものになるわけです。これは人間が長い間、執着し続け、迷い続けてきた道なのです。だから真の教え、本願の真実に遇うと、真実の用きそれ自身が、念仏となって私たちの上に念仏となって喚びかけ、用いてくださっておるとそういう大転換が起こるわけですね。次の不可思議光という言葉ですが、

不可思議光…無量光ともいい、阿弥陀仏のこと。梵語 *Amitābha* 阿弥陀の訳で、阿弥陀仏のはたらきを空間的に表し、世界の隅々まで智慧の光が照らしてあらゆるものを救う。「…阿弥陀仏なり。この如来は、光明なり。光明は智慧なり。智慧はひかりのかたちなり。智慧またかたちなければ、不可思議光仏ともうすなり。」（親鸞『一念多念文意』）

不可思議光っていうのは人間の思いはからいを超えた真実の阿弥陀の智慧の用きなんです、その用きがですね、私たちの上に用いていると。すでに用いていると。そこに不可思議光という意味があるわけです。そこに「帰命無量寿如来 南無不可思議光」というこの二句がですね、念仏から始まっているということは非常に大事な「正信偈」全体を貫いておる大事な願いが初めにうたわれているということでございます。ちょっと時間が長くなりまして、不十分ではありますが、一応今日の「正信偈についての話のほうはこれで終わらせていただきたいと思います。どうもご清聴ありがとうございました。